

令和3年度徳島県教育委員会・令和4年度文部科学省指定
【吉野川市立学島小学校】～研究紀要より～（一部抜粋）

Ⅱ 研究の概要

1 研究主題について

（1）研究主題

豊かな人権感覚を身に付け、多様性を認め合う子どもの育成
～つたえ合い、つなげよう「なかまの像」を中心とした仲間づくり～

（2）主題設定の理由

① 主題について

ア 「豊かな人権感覚を身に付ける」ということ

イ 「多様性を認め合う」ということ

② 副主題について

ア 令和3年度の取組を踏まえて

イ 「つたえ合い、つなげよう」ということ

ウ 「『なかまの像』を中心としたなかまづくり」ということ

2 研究の方向性と仮説

3 研究の内容

（1）研究の柱

【研究の柱1】 豊かな人権感覚を身に付ける子どもの育成（友情・前進）

【研究の柱2】 多様性を認め合う子どもの育成（希望・やさしさ）

- | | |
|-------|--------------------------|
| (テーマ) | ① 自己有用感に裏付けられた自尊感情の育成 |
| | ② 個人権課題に迫る学習活動 |
| | ③ ICT機器を活用した人権教育の推進・普及効果 |
| | ④ 家庭・地域との一層の連携をめざした取組 |

（2）実施方法

① 自己有用感に裏付けられた自尊感情の育成についての実践研究

ア 児童のくらしに学び、児童の願いや悩みを中心に据えた実践を大切にし、すべての児童の生きる力を育成し、学力の向上に努める。

イ 異学年班のスマイル清掃、スマイル集会の活性化を図り、異学年間の交流を深める。

ウ 『なかまの像』を中心に据えたなかまづくりから「差別をしない・させない・許さない心」を育成するための教育活動を全領域において実施する。

エ 『なかまの像』に関連したなかまづくりに関わる学校行事の充実を図る。

② 個人権課題に迫る学習活動についての実践研究

ア 「“あわ”人権学習ハンドブック」や「“あわ”人権学習ハンドブックプラス」、
「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕」を活用する。

イ 態度化、行動化と結び付く指導の充実を図る。

- ・「協力的・参加的・体験的な活動」の推進
 - ・普遍的な視点、個別的な視点の双方の視点からの取組の充実
 - ・資料の精選や指導方法の工夫
- ウ 学校評価等に位置付けた定期的な点検・評価に努める。
- エ 「外国人」「同和問題」「アイヌの人々」等の個人権課題について理解を深めるための教職員研修を実施する。
- ③ ICT機器を活用した人権教育の推進・普及効果について研究
- ア 各学年の授業研究において、ICTの効果的な活用を行い、「協力的・参加的・体験的な活動」の工夫改善を図る。
- イ オンラインを活用し、交流による人権学習の取組やチェーンスクール間での研修・交流学习等を行う。
- ④ 家庭・地域との一層の連携をめざした取組についての実践研究
- ア 授業参観や、保護者や地域住民が集まる機会を活用し、学校における人権教育の取組についての理解を図り、人権意識を高める。
- イ P T A・地域社会・諸団体との連携により、差別の解消をめざす研修や啓発活動を行い、地域全体での取組を推進する。

(3) 検証・評価・普及等

① 検証・評価

- ア 児童の日記、授業後の振り返りシートやノートによって人権感覚の高まりや成長を評価し、児童への指導や授業改善へつなげる。
- イ 「Q-Uテスト」「心のアンケート」「学校評価アンケート」等の結果の変化から、児童や保護者の意識の変容を確認し、指導資料や指導方法の改善に生かす。
- ウ アンケートの項目には、なかまづくりに関わる互いの人権を尊重できたかを問う項目を設定し、研究の成果の検証に活用する。
- エ 「心のアンケート」については、本校が重点的に取り組む「なかまづくり」や個人権課題から「外国人」「同和問題」「アイヌの人々」を取り上げ、それぞれに対して、人権教育を通じて育てたい資質・能力の3側面から測定指標を設定し、児童の変容を見取るようにする。

② 普及・啓発

- ア チェーンスクール（小中一貫教育徳島モデル）を活用し、学んだことを他の小中学校へ情報発信していく活動を通して人権教育の普及を図る。態度化，行動化へと結び付く指導の充実を図る。
- ・チェーンスクールの学校間ネットワークを生かすとともに、オンラインも活用し研修や人権学習を共有し、研究成果の普及を図る。
 - ・研究指定後も、チェーンスクールでの持続可能な関連行事の在り方を模索し、中学校区全体で人権教育に継続的に取り組む。
- イ 学校ホームページやメール等のデジタル機器を活用し、本校の人権教育の取組や人権学習の内容や様子を保護者や地域へ発信する。
- ウ 人権学習での児童の感想等を学年便り等に掲載し、児童の変容を保護者と共有する。
- エ 人権学習授業参観や人権学習講演会をP T Aへの啓発の機会と捉え、個人権課題等について理解を深められる学習を実施する。

Ⅲ 研究の実際

1 全校での取組

(1) 『なかまの像』を中核に据えた取組

① 『なかまの像』について

本校には、なかまづくりの象徴である『なかまの像』がある。今から50年前に児童会を中心に、共に考え、支え合い、差別に立ち向かう「なかまづくり」の心のよりどころとして創られたものである。像にはそのときから卒業生の名前が記されている。毎年『なかまの像』の引き継ぎ式があり、よりよいなかまづくりができるようにと思いを込めて全校児童の見守る中、卒業する6年生から5年生へとその思いは受け継がれていく。『なかまの像』は入学式や卒業式のときにも壇上に飾られている本校の宝物である。普段は玄関に飾られており、いつでも見ることができる。「お父さんの名前があった」「おばちゃんの名前がある」など、児童は像を見るたびにその歴史を感じている。







【『なかまの像』】

この像には創った当時の思いが込められている。1代目の像には「友情」「前進」「希望」という3つの言葉が刻まれた。「友情」を育み、団結することにより「前進」し、「希望」をもって、何事にも努力できる児童になってほしいというものがある。さらに、平成12年には2代目が創られた。「友達のつらさや悲しさが自分のことのように感じられる人になりたい」という思いが「やさしさ」の言葉で刻まれた。

50周年を迎えるに当たり、児童にはこの像に込められた4つの思い「友情・前進・希望・やさしさ」を改めてかみしめ、これからの生活や自分の生き方に生かしてもらいたい。

『なかまの像』にもっと親しんでもらうため、4月には各学級で『なかまの像』の意義指導を行っている。今年も先輩から引き継いだこの4つの思いを胸に楽しい学級をつくろうと取り組んでいる。また、4つの言葉のピクトグラムを児童会で作った。また、『なかまの像』の言葉は低学年には難しいものもある。そこで安易な言葉でわかりやすく説明したものを作り掲示している。

本校はこれまでも『なかまの像』を中心に据えたなかまづくりに取り組んできたが、これまでの実践を継承し、よりよい人権教育を推進していきたい。

			
あいてのきもちを かんがえよう。	やりたいことを みつけよう。	すすんで チャレンジしよう。	だれとでも なかよくしよう。
やさしさ	希望	前進	友情

【『なかまの像』を分かりやすく説明】

② 児童会を中心とした取組

ア 4つの思いをテーマに

『なかまの像』に込められた「友情・前進・希望・やさしさ」の4つの思いをテーマにした月目標を提示し、代表委員会でそれを元に児童が週目標を話し合った。

〔例〕10月・・・進んで何事にも取り組もう〈前進〉

11月・・・感謝の気持ちを伝えよう〈友情〉

12月・・・なかよく助け合おう〈やさしさ〉

1月・・・目標をもって助け合おう〈希望〉

学級で学習するときや話し合うときに「友情・前進・希望・やさしさ」の4つの柱を意識するように心がけた。

児童会主催のミニ集会も『なかまの像』に込められた4つの思いについてそれぞれの委員会で話し合いテーマを決めて行った。

○体育・ボランティア委員会・・・〈前進〉

○放送委員会・・・・・・・・・・・・・・〈友情〉

○購買委員会・・・・・・・・・・・・・・〈やさしさ〉

○保健・給食委員会・・・・・・・・・・・・〈希望〉

○栽培・環境委員会・・・・・・・・・・・・〈前進〉

○図書委員会・・・・・・・・・・・・・・〈希望〉

（詳しくは、委員会活動の欄参照）

また、このピクトグラムは、ステッカーにして、学習や生活の中で、象徴的なものとして活用している。



【友情】



【前進】



【やさしさ】



【希望】

イ 『なかまの像』引き継ぎ式

卒業式が近付いてきた3月上旬、卒業生から5年生に『なかまの像』が引き継がれた。卒業生から、自分たちも先輩方から引き継いだ『なかまの像』に込められた差別に立ち向かう思いや、児童会役員として1年間頑張ってきたことを伝えられた。

また、卒業生の思いを引き継いだ5年生は、これから学校の中心としてどんな学校にしたいか、何を頑張っていくかという決意を伝えた。



【4つの思い】



【『なかまの像』を引き継ぐ】

③ スマイル集会

ア 体育・ボランティア委員会

体育・ボランティア委員会では、『なかまの像』の4つの言葉のうち「前進」をテーマにオンラインミニ集会を行った。令和3年に行われた東京オリンピック・パラリンピックを題材にしたクイズを作り、感動を与えてくれたアスリートの姿から全校児童が楽しみながらたくさんのことを学べるよう工夫した。

調べる中で、メダルに隠された思いや大会初の試み、スリーアギトス（パラリンピックのシンボルマーク）に込められたアスリートの常に前進して諦めない強い思いを知り、クイズにも反映させた。

クイズの最後の問題では前進する自分を思い浮かべ目標や夢を考え、希望へとつなげることで集会を終えた。



【クイズスライドの一部】

イ 放送委員会

放送委員会では、『なかまの像』に込められた願いや4つの言葉「友情・前進・希望・やさしさ」の意義などについてオンライン校内放送で紹介した。

『なかまの像』は、今から約50年前の昭和48年に生まれました。

いじめや差別をなくしたい、みんなが楽しい学校にしたいという思いをこめて当時の児童会によって創られました。今も玄関に飾ってあるので、みなさんも見たことがありますよね。

この像には「友情」「前進」「希望」「やさしさ」という4つの言葉が添えられました。それから50年もの間、大切に大切に受け継がれてきたのです。

学島小学校では『なかまの像』をシンボルとしてなかまづくりの学習や活動が行われています。

昨年も、学校の中心となって活躍した卒業生から今の6年生に引き継がれています。今年も6年生は、卒業生から引き継いだ「差別は絶対許さない」という思いや願いを伝えてくれます。

このたくさんのペナントには、同じ思いで卒業していった先輩方の名前が書かれています。お父さんやお母さんの名前を見つけた人もいるでしょう。

こうしてみなさんを見守ってくれているのです。私たちもこの思いを受け継いで、いじめや差別のない楽しい学島小学校にしていきたいと思います。



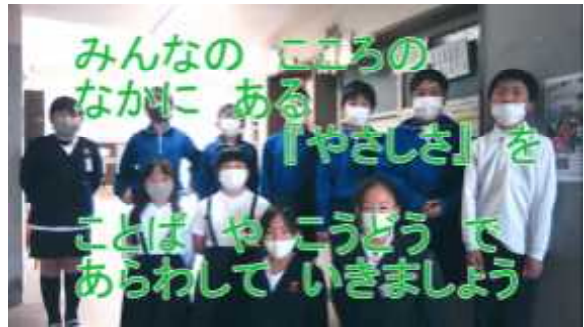
【『なかまの像』紹介ビデオの一部】

ウ 購買委員会

購買委員会では、放送委員会の『なかまの像』紹介に引き続き、『なかまの像』の4つの言葉のうち「やさしさ」をテーマに動画作成を行った。

児童の話合いから、学島小学校のみんなに「やさしい」言葉かけとはどのようなものかを考えてほしいという声上がり、6年生を中心に寸劇のシナリオを作った。4年生から6年生の児童11名がそれぞれの役を演じる寸劇で、廊下で鬼ごっこをしていた児童が購買で買い物をしていた児童にぶつかって倒してしまい、購買委員の児童や周囲の児童がどう声をかけるかというものである。声かけや態度の取り方を場面①、場面②に分け、どのように違うかを学級で話し合う内容にした。

「思っているだけでは伝わらない。気持ちを言葉や行動に表していこう。」というメッセージを込め、朝のミニ集会で学年ごとに視聴・話合いを行った。上級生からのメッセージは、下級生の児童にとって心に残るものであったと考える。



【「やさしさを伝えよう」動画の一部】

エ 保健・給食委員会の取組

保健・給食委員会では、『なかまの像』の4つの言葉のうち「希望」をテーマにオンラインミニ集会を行った。この「希望」は、差別のない社会になってほしい、一人一人が尊重される世の中になってほしいと強く願うことである。保健給食委員会で話し合い、「希望」を叶えるためには、まずは自分の心と体が元気であることが大切だという意見が出た。そこで、保健・給食委員会からクイズを出題し、全校児童にも挑戦してもらうことで、心と体が元気になるような集会を企画することにした。まず、クイズを作るために、保健室や図書室にある本から心や体の健康に関する情報を集めた。話し合いを通して、「早寝・早起き」や「テレビ・ゲームの使用時間」など健康に関する3択クイズの全5問を出題することになった。ミニ集会当日は、二人一組になってクイズを出題し、健康の大切さについて呼びかけた。各教室で視聴していた児童は意欲的にクイズに取り組んでいる様子であった。発表を終えた児童も「みんながクイズを楽しんでくれてよかった。」「緊張したけど、大きな声で伝えるように意識した。」など、達成感を感じているようであった。新型コロナウイルス感染症拡大のため活動が制限される中ではあるが、今後もなかまづくりを意識した委員会活動を継続していきたい。



【クイズ作り】



【ミニ集会】

オ 環境・栽培委員会

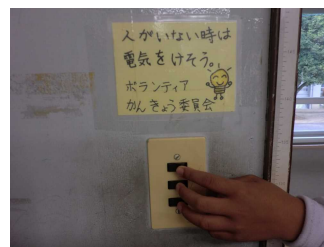
環境・栽培委員会では、『なかまの像』の4つの言葉のうち「前進」をテーマにオンラインミニ集会を行った。環境に関するクイズを自分たちで作って、SDGsについて知らせることにより、地球環境のために自分でできることを考えてもらうきっかけにしたいと考えた。住みよい環境が持続するようみんなで行動することこそ、「前進」だと思った。次のクイズは集会の内容の一部である。

みなさんは、SDGs（エス・ディー・ジーズ）という言葉を知っていますか。

今、地球では貧しい人々が取り残され、環境は悪くなり、このままでは、世界がたち行かなくなるという強い危機感のもとSDGsという目標が17個決められました。これから紹介する私たちの行動は『なかまの像』の前進にもつながります。私たちの未来のために、今できることから協力していきましょう。私たち環境・栽培委員会はそのことをクイズ等にしてお知らせします。

第1問 トイレのスリッパの並べ方は、こうである。○か×か。

答えは○です。次に入る人のことを考えてスリッパを履きやすいように並べます。



【電気を消す】

第2問 教室を最後に出る人は電気を消す。

○か×か。

答えは○です。電気は貴重なエネルギーです。使わないときは消して、大切に使いましょう。

第3問 手を洗っているとき、石けんで手をこすっている間は水を止める。○か×か。

答えは○です。水は限りある資源です。

電気と同じように、大切に使いましょう。

次は3択クイズです。問題の後、答えが1なら1を、2なら2を、3なら3をこのように指で示してください。



【リモート集会の様子】

第4問 「食品ロス」とは何でしょう。

- 1 食べ物を焼くこと。
- 2 食べ物を無駄に捨てること。
- 3 食べ物を食べること。

答えは2です。「食品ロス」とは食べられるはずの食べ物を食べずに捨てることです。ゴミも増えるし、食べ物がもったいないので「食品ロス」にならないように、給食を食べきることも大切です。

第5問 買い物に行くときに「マイバッグ」を使うのはどうしてでしょう。

- 1 おしゃれのため。
- 2 他の人と区別するため。
- 3 プラスチックの使用を減らすため。

答えは3です。きちんと処理されていないプラスチックのゴミが海を汚し生き物に害を与えています。マイバッグはプラスチックのゴミを出さないための取組の1つです。

カ 図書委員会

図書委員会では、『なかまの像』に込められた4つの言葉のうち「前進」をテーマにオンラインミニ集会を行った。ミニ集会の内容は、二人一組になり、おすすめの本を紹介したり、図書室での過ごし方について発表したりした。

おすすめの本の紹介では、普段の図書室の利用が下学年に偏っていることから、どの学年の児童にも図書室を利用してもらえるように話し合った。そして、委員二人組で相談して本を選び、紹介することにした。選んだ本の内容からクイズ形式にすることで、児童が興味をもって聞けるように工夫した。

また、図書室での過ごし方については、気になっていることを委員会の時間に話し合い、気を付けてほしいことを発表した。

ミニ集会の成功は、自分たちでやり遂げたという委員の自信につながった。児童が新たな本との出会いを大切に、規律やマナーをしっかりと守りながら「前進」できるような取組をこれからも続けていきたい。



【ひみつシリーズのクイズ】



【うまく写っているかな】



【ミニ集会大成功】

(2) 「あいさつ」の取組

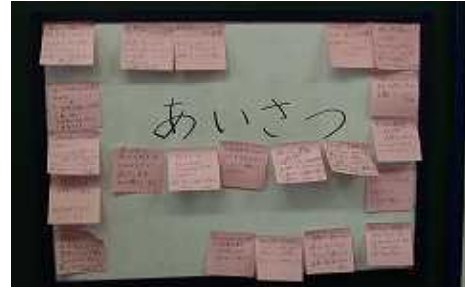
あいさつは、コミュニケーションの基本であり、よりよい人間関係を築くための第一歩である。とても短い言葉ではあるが、気持ちのよいあいさつだけで、あいさつした方もされた方もうれしくなる。地域の方から「学島小学校の児童は、あいさつがすばらしいですね。朝から元気をもらえました。」という電話をいただくほど、本校の児童はよくあいさつができる。しかし、個々には、あいさつの声が小さかったり、気持ちのこもったあいさつができていなかったりする現状があり、あいさつについて改めて学校全体で取り組むこととした。

① 気持ちのよいあいさつ

まず、校内研修やアンケート等を通して、児童のあいさつについて実態把握を行った。KJ法により児童の課題を把握したところ、全体的に見るとあいさつはよくできているものの、個人差があることや児童によってあいさつの仕方が様々であることが分かった。気持ちのよいあいさつを推進するためには、よりよいあいさつの仕方について考え、継続的に指導することが大切である。そこで、各学級において改めてあいさつの大切さや気持ちのよいあいさつの仕方について話し合い、学校全体で共有化を図った。気持ちのよいあいさつの仕方についてまとめたものを廊下に掲示したり、あいさつ指導のポイントにしたりして、児童がそれらを意識してあいさつができるように工夫した。



【校内人権推進委員会】



【KJ法による課題の把握】

○気持ちのよいあいさつの仕方

- ・相手に聞こえる声で
- ・できれば体をとめて
- ・あいさつを言ってからおじぎ
- ・距離をとって

○登下校時のあいさつ

中庭から職員室に向かって「おはようございます」「さようなら」

○会釈

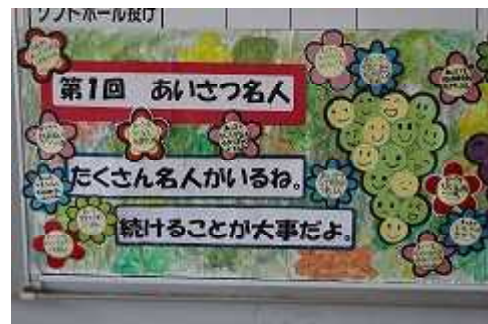
- ・その日初めて会った人には声を出してあいさつをし、2回目以降は会釈をする。
- ・玄関や廊下で会ったときは必ずあいさつか会釈をする。



【あいさつの様子】

② あいさつカード

全校であいさつカードに取り組んだ。1日10人以上あいさつができればカードに○印を付け、1か月半の期間中に達成できた日が20日以上あれば、体育・ボランティア委員会より、あいさつ名人として表彰される。表彰された児童は、第1回は「ニコニコスカットくん」、第2回は「あいさつフラワー」を1人1枚ずつ書き、廊下に掲示した。「あいさつフラワー」には、あいさつをするとどんな気持ちになるか、どんなよいことがあるかについて書かれている。自分の書いたカードが掲示されているのを見つけて喜んでいる児童の姿も見られた。



【あいさつ名人の掲示】

③ 「あいさつトップで賞」

毎朝、中庭前であいさつ運動をしている体育・ボランティア委員会の児童が全校生のあいさつの様子を見て、お昼の放送で「あいさつトップで賞」を発表している。名前を呼んでもらえた児童はとてもうれしそうだった。また、「大きな声だったから」「おじぎがきれいだったから」など理由も添えて発表しており、他の児童も次回のあいさつ名人に選ばれるようにしようという意欲を高めている。あいさつすることに恥ずかしさを感じていた児童も、友達が元気よくあいさつする姿を見て、少しずつ抵抗感がなくなり、進んであいさつできるようになってきている。

(3) 異学年集団による取組

『なかまの像』の4つの思い「友情・前進・希望・やさしさ」を受け継ぎ、なかまづくりをさらに充実させるための取組として、異学年集団による活動を多く取り入れている。特に、全校児童を8つの班に分けた「スマイルぶどう班」を設定し、様々な活動を行っている。以前は、月に2回の集会活動やなかよしタイム（業間休みを活用したスマイルぶどう班による外遊び）などがあった。なかよしタイムでは、上級生を中心に遊びを考え話し合い、業間休みにスマイルぶどう班で遊び、団結力を高めていた。

しかし、令和2年度からは新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、異学年による交流やスマイルぶどう班による活動が制限されるようになった。コロナ禍で人とのつながりや交流の大切さを改めて痛感し、異学年集団による取組の意義を考えるきっかけとなった。令和3年度からは、感染症拡大予防に配慮するとともに、ICTの活用等様々な工夫をしながら、集会活動や班旗づくり、オリエンテーリング遠足、運動会でのスマイルぶどう班対抗種目等を行った。

① スマイル清掃

毎週金曜日の清掃は、スマイルぶどう班によるスマイル清掃を行っている。清掃時間には、全校で合言葉「だ・い・じ（だまって・いっしょうけんめい・じかんいっぱい取り組むこと）」を目標に清掃をしている。

それぞれの清掃分担場所では、高学年の児童がリーダーシップを発揮しながら、下学年の児童と一緒に清掃をしている。異学年で清掃の仕方を教え合ったり、一つの場所を協力して美しくする目的を共有したりすることを通して、伝え合う喜びを実感する機会となっている。また、担任以外の教員と一緒に清掃をすることで、児童が新しい考え方に触れたり、全教員で児童の様子を共有したりすることができる。



【手洗い場の清掃】



【教室の清掃】

② オリエンテーリング遠足

「郷土を知り、郷土への関心を高める」「友情を深め、みんなで協力してひとときを過ごす」「体力づくりを行うとともに、交通マナーを身に付ける」の目的のもと、オリエンテーリング遠足を実施している。各班の6年生が中心となってリーダーシップを発揮し、各チェックポイントを通過してゴールをめざす。

各チェックポイントでは、班のみんなで力を合わせ、一つの課題をクリアしていた。その中で班の友情が深まり、仲間意識や団結力を高めることができた。また、児童は、課題をクリアするごとにスタンプが一つもらえ、友達と協力して物事を成

し遂げる達成感を得ているようだった。

オリエンテーリング遠足の後、なかよしタイムを取って、班の仲間と一緒に外で遊んだり、活動を振り返ったりした。共に時間を過ごす中で、上級生は下級生を気遣う場面や、下級生が上級生を頼る場面が多く見られた。



【みんなであいさつ】



【つないでつないでボーリング】



【班ごとの振り返り】



【振り返りカード】



【スタンプカード】

③ 運動会でのスマイルぶどう班対抗種目

秋季運動会では、スマイルぶどう班による対抗種目として、玉入れとリレーを行った。練習においては、作戦を練りながらリレーの走順を決めたり、アナウンスで班の紹介をされたときのポーズを決めたりする時間を設定した。児童は目標を達成しようと進んで話し合い、班の団結力ややる気、競技への楽しみを高めていた。また、練習をする中で、6年生は他の学年に教えたり行動で示したりしながら、より6年生らしく下級生をリードしようとする姿が見られた。



【スマイルぶどう班対抗玉入れ】

④ 放課後活動

ア 体力づくり

体力づくりは、3年生から6年生までの希望者が参加し、週4日程度、実施している。運動を通して、体力の増進を図り、友達と競い合い、自己のもつ能力を更新していく喜びを味わわせたり、友情を深め、互いに励まし合う仲間意識を育てたりすることを目標としている。内容については、4、5月は器械体操、6、

7月は水泳、8～10月は陸上運動と、それぞれ5、6年生は「体操発表会」「水泳能力検定会」「陸上運動記録会」への参加を目標にし、3、4年生は自分の記録の向上をめざし、どの児童も積極的に取り組んでいる。11～2月は6年生が中心となって担当教職員と相談しながら活動内容を自分たちで考え、持久走や体幹トレーニングなどいろいろな種目に挑戦している。

活動では、6年生が進行役をローテーションし、全員がよい手本となって全体を導けるように工夫した。最初は恥ずかしそうにしていたが、経験を重ねるごとに大きな声でリーダーシップを発揮できるようになった。6年生からは、「初めはとても恥ずかしかったけど、だんだんと緊張なくできるようになった。」「下学年や同級生と楽しく協力しながら活動ができた。これからも続けていきたい。」等の感想があった。また、初めて経験した3年生は、「上学年のお兄さんお姉さんたちが優しく教えてくれて、とても楽しく活動ができた。」「こけたときに、『大丈夫？いける？』と声をかけてもらえてとてもうれしかった。これからも楽しく活動がしたい。」と、うれしそうだった。

運動が苦手な児童も参加することで、運動する機会の確保やきっかけづくりにつながっている。また、できるようになった喜びや達成感を味わい、運動への意欲向上にもつながった。

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、なかなか思うように活動できていないが、今後も様々な工夫により、異学年集団での交流を通して、互いに支え合い、励まし合えるなかまづくりを進めていきたい。



【体幹トレーニング】



【練習の様子】

イ 獅子舞

獅子舞クラブは、4年生から6年生までの有志の児童で構成されている。約30年前、継承者不足などで途絶えていた地元の神社の獅子舞を復活させようと発足した。過去の映像や楽譜からリズムと動きを確認したり、上級生が下級生に教えたりしながら継承に努めている。

「地域の伝統芸能を守り、進んで受け継いでいこう」「仲間と共に練習する中で、協力することの大切さを学ぼう」という活動目的のもと、練習に励んできた。獅子舞を通して地域への愛着を育てるとともに、異学年交流をする中で児童のなかまづくりの場にしたいという思いで指導にあたっている。

毎回練習を重ねていくと、難しいリズムにあきらめそうになる児童や、うまく教えるにはどう伝えたらよいのだろうと思い悩む児童の姿も見られた。生活の中であまり経験のないことに挑戦するのは、ときには困難に感じられることもあったが、友達と一緒に何度も練習し、できるようになったときの達成感や充実感は非常に大きなものであった。4年生から2年間、3年間と続けて活動している児

童もおり、「昨年より上手に太鼓をたたけるようになって、おもしろくなってきた。」「これは夢中になる。」と、練習時間以外にも自主的に練習をする姿が見られた。また、発表会後にクラブを卒業する児童からは、「今よりももっともっとよい獅子舞クラブをつくってほしい。」と下級生に願いを伝えていた。

このような経験は、豊かな人権感覚を身に付け、よりよいなかまづくりをしていく上で有効であったと実感している。



【校内発表会】



【練習の様子】

ウ ファンファーレバンド

ファンファーレバンドは、4年生から6年生までの児童が在籍し、週に4回程度活動している。「友達とハーモニーを奏でることの楽しさや豊かさを感じよう」「仲間と共に協力することの大切さを学ぼう」と『なかまの像』の「友情」「前進」への思いを高めて練習に励んできた。児童一人一人の成長を支えるとともに、異学年交流を通して、仲間に対する優しさや思いやりの心を育てていきたいと考えている。

近年は、新型コロナウイルス感染症の影響により、様々な行事の中止や活動制限があり、練習時間の確保や発表する機会を設けることが難しかった。しかし、感染症対策を徹底しながら工夫して練習に取り組むことで、少しずつ児童の音がよりよいものになってきた。初めは「難しい。」「音が上手く出ない。」と言っていた児童も、友達と教え合ったり、タブレットを活用して音を確認め合ったりすることを通して、粘り強く練習に取り組むことができた。

運動会に向けて、活動時間以外にも自主的に練習に取り組む姿が見られ、本番では堂々と演奏をすることができた。終わった後の感想では、「人がたくさんいて緊張したけれど、いつもの練習を思い出して頑張った。」「運動会までに楽譜を見ずに吹けるようになったのでよかった。」「来年は今年より上手になって、みんなで力を合わせて演奏したい。」と、自分たちの努力や成長を認め合う姿が見られた。保護者や下級生に喜んでもらえたことも、児童にとって大きな喜びであり、仲間と共に演奏した達成感や充実感は、次の目標に向けた努力の源になっている。

互いの音色の響きを感じながら演奏することで、児童の心は優しく豊かに育っ

てきている。困っている仲間を見過ごさず、助け合いながら練習に励む姿から、なかまの輪の広がりを感じられる。ファンファーレバンドの活動を通して、豊かな人権感覚や多様性を認め合おうとする心情を養うことができたと考えている。今後も児童が活躍できる場を設け、なかまと共に心と音色を合わせる経験を重ねていきたい。



【運動会】



【屋外ミニコンサート】

(4) 小中一貫教育（徳島モデル）推進事業

川島地区では、令和元年度より、地域と連携して学校を運営し、学校を中心として地域を活性化していくことを目的としたチェーンスクール（徳島モデル）の指定を受け、学島小学校、川島小学校、市立川島中学校の3校で小中一貫教育の取組を進めている。交流学习等が計画通りに進められない中で、「物理的・心理的に離れた学校同士をつなぐ、地域や保護者をつなぐ、これまでの成果をつなぐ、そして教育の質の向上を図る」ことを目標とし、3校が協力しながら実践を行っている。

① 人権問題意見発表会

市立川島中学校の人権問題意見発表会には、6年生が参加し、中学生の意見発表を聞いたり、意見交換を行ったりしている。しかし、令和3年度は、新型コロナウイルス感染症防止のため、予定していた人権問題意見発表会が実施できなかった。そこで、中学生の書いた作文を読ませてもらうことにより、中学生の人権意識に触れた。様々な人権問題について、身近な先輩がもつ意見や気持ち等を知ることにより、児童の人権意識が高まるとともに、自分の考えを深めることにつながった。

② 中学校オープンスクール

中一ギャップの解消と、中学校生活への期待をもたせることを目的に、中学校の授業体験や学校説明、部活動紹介等を行った。実施後に行ったアンケートでは、中学校の授業が「楽しみ」「少し楽しみ」と回答した児童の割合が8割以上であり、6年生の児童にとってこの取組が中学校生活への期待を高める活動となっていた。また、中学校1年生に対して行った追跡アンケートでは、「今後もこのような取組を続けてほしいか」という項目に9割以上の生徒が肯定的な回答をしており、共に学ぶ楽しさを味わっていると感じる。



【英語科の授業体験の様子】

【英語科の授業体験の様子】

③ キャリア教育発表会

小学6年生と中学2年生という2学年差の児童生徒が集うことで、これまでの自分の歩みを振り返り、将来に向けて自分の夢について考えることを目的とし、キャリア教育発表会を行った。小学6年生にとっては、数年後の自分の成長モデルとして、中学2年生にとっては自らの成長を実感する機会となった。昨年度は、地域の先輩である四国放送アナウンサー遠藤 貴巳さんを講師に迎え、「好きな仕事のできる幸せ」について講演会を行った。児童生徒にとって、よいロールモデルになったと感じる。



【キャリア教育発表会】

④ 防災学習発表会

総合的な学習の時間に、各校ごとに自分たちの住む地域の防災マップを作成し、互いに学んだことをオンラインを通して交流する活動を行った。

川島小学校との交流会では、それぞれの校区の危険箇所や、地域の方にインタビューした内容、学習を通して考えたことを発表し合った。タブレットを活用して撮影した危険箇所の写真を見せ合うことで、自分たちの調べた地域と似ているところや違うところを意識して学び、具体的な防災への取組について考えることができた。積極的に質問し合い、一人一人が真剣に自分にできることを考えていた。

また、市立川島中学校との交流会では、中学1年生が防災教育で学んだことを小学生に向けて発表し、さらに多角的な視点から防災について考えた。交流会の後には、自分たちの作成した防災マップを見直し、学習を深めることができた。

地域の他の小学校や中学校と共に学び合うことを通して、防災に関する意識を高めるとともに、自助に加え共助の精神を養うことにつながった。